

銚子における「旅漁師」と「旅商人」の定着過程に関する一考察

阿部綾子

A Study of the Process of Settlement of Itinerant Fishermen and Itinerant Merchants in Choshi

はじめに

- ① 十七世紀後半～十八世紀初頭の銚子社会
- ② 他国商人の定着過程
おわりに

【論文要旨】

房総地方は、江戸時代に、他国から出漁してきた漁民が多く訪れたことで知られている。特に、九十九里浜沿岸地域を対象とした紀州漁民の活躍については、研究成果が積み重ねられて来ている。本稿では、九十九里浜沿岸地域ではなく、現在の千葉県銚子市域を対象に、「旅漁師」や「旅商人」と呼称される者達が銚子の社会に定着してゆく過程に着目した。それはつまり、「旅」の者が「旅」としての性格を失つてゆく過程である。

利根川の河口付近に位置する銚子は、物流の中心地として栄えた土地柄である。「旅」の者がどこから銚子に来住し、銚子社会に定着するためにはなる手段を経ていたのかを明確にすることは、多くの「旅」の者を抱え込む形で独自に形成されてきた当該地域の文化土壤のありようの一端を示すことである。

「旅」の者の出身地をできるだけ詳細に明らかにするための史料としては、浄土宗

淨国寺（現銚子市春日町）の、十七世紀後半から十八世紀初頭にかけての過去帳を検討した。その結果、従来指摘されてきたような紀州出身者だけではなく、非常にバラエティに富んだ地域からの多彩な来住者を抱えていたことが明らかとなつた。さらに、同時期には、銚子において多種にわたる生業が営まれており、非常に繁華な町場が出現していたことが、被供養者の職業から想定された。

また、「旅」の者がどのようにして銚子社会に定着してきたのかを具体的に知るために、それぞれ勢州と紀州を出自とする者での調査を行つた。その結果、「旅」の者の中には、「地」の有力者の家に寄宿し、その庇護下において「地」の者との協力関係を築くことにより、自らも「地」の者として定着してきた者がいたことが判明した。